

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2018年12月8日

文責：JUN

## 学校づくり・授業づくりの立ち上げと深まり

外部協力者としていくつもの学校の訪問を始めて15年になる。わたしがかかわる学校、それは当然、「学び合う学び」に取り組む学校であり、「学び合う学び」を核とした学校を目指す学校である。これまでかかわってきた学校を思い起こして改めて思うことは、教師たちの教育という仕事に向き合う誠実さである。自らの授業づくり、学校づくりをありのまま公開し、その向上を図る、そのために外部協力者を招聘する。もちろん、私がかかわる学校は、そうした学校のごく一部である。「学びの共同体」には何十人ものスーパーバイザーがいるのだから学校数は相当な数になるにちがいない。もちろん外部協力者を招聘している学校は「学びの共同体」関係だけではない。そう考えると、日本の学校・教師たちの教育にかける情熱は本当に誇らしい。

私の学校訪問は、そのほとんどが、「学び合う学び」への立ち上げ時期から始まる。訪問するようになって10年を超えた学校もある一方、本年度からかかわるようになった学校もある。公立学校だから校長も教員も入れ替わる。それでも10年もの間、継続して取り組み続けているのは素晴らしいし、憧れを抱いて新たに始めようとしている学校が次々と生まれるのは心強い。

本年度、新たに訪問するようになった学校は6校である。この校数は私にとっては例年にはない多さである。そのためなのだと思うが、一年の3分の2を経過した今、「学び合う学び」の立ち上げとか「学び合う学び」への切り替えということについて、改めて考えることが多くなった。そのことについて、記してみることにする。

### 1 「学び合う学び」への出会い方

強い意欲を持った個人が取り組み始めるのとは異なり、何人もの教師が協同して取り組む学校における立ち上げには難しさがある。当然のことだが、教師間に、経験差、授業観の違いなどの個人差があるからである。教師による指導法に熱心に取り組んできたこれまでの授業から、教えることを抑制して子どもに協同的に取り組ませる授業に学校として転換する際、この個人差への対応が迫られる。新学習指導要領への移行期に入って、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりの大切さが叫ばれるようになった今、この壁をどう乗り越えるかが問われている。

そういうことを勘案すると、立ち上げでとても重要なのは、「対話的学び」、私なりに言えば「学び合う学び」であるが、そういう学びとどのように出会うかということである。よい印象を抱けるように出会うことができれば無理なく取り組みを進めることができる。私のかかわってきた学校のほとんどが、立ち上げにおいてこのことに腐心していたように思う。

もちろん、出会い方は一つではない。その学校の先生方で工夫されるのがいちばんよい。ただ、忘れてならないことがある。その第一は、どういうやり方をするのが「対話的学び」「学び合う学び」

か、というような方法論的な出会い方にしないことである。定められた方法に当て嵌めて行うのが「学び合う学び」ではないからである。大切なのは理念である。子どもの学びにとって、子どもの成長にとって、しかもすべての子どもにとって、なぜ「学び合う学び」が必要なのかという理念にしっかり出会わなければ、その学校の学びは子どもにとってよいものにならない。

確かに、「学び合う学び」には、ペア・グループによる学びを軸にするとか、子どもが夢中になって取り組むために「ジャンプの課題」を組み込むとかいった方法的なことはある。しかし、やり方の模倣のようになってしまうと、授業づくりが形だけになり矮小化されてしまう。また、やり方だけの取り入れをしようとする、自分にはこれまでやってきた方法があるという教師が何人も現れ、学校内に不協和音が生まれてしまう。

大切なのは、方法ではない。すべての子どもの学びを保障する、探究的学びを実現するというような理念を共有することである。その理念を実現しようと取り組むなかで、方法的なものが、理念の裏付けを得て浮上してくる。

出会い方の第二は、本気で取り組んでいる実践に実際に会うということである。本を読むのもよいし、講演を聴くのもよい。けれども、もっともよいのはそういう授業に実際に会うことである。そのとき目にする子どものすがた、子どもの学びの事実が教師たちの心を動かす。心が動いたとき、人は納得できる。やってみたいと思う。目にしたことが憧れとなる。

教師は日々子どもの事実に向き合っている。それだけに子どもの実際のすがたがもっとも心に響く。感動すれば自分もそうしたいと本気になれる。とは言っても、すべての教師が学校を離れて他校に出かけるということはできない。出かけるとなれば費用もかかる。けれども、実際の実践への出会いに勝る良い出会い方はない。私のかかわってきた学校は、そのことがわかっているから、なんとかしてどの教師にもよりよい出会いが生まれるように工夫している。

出会いも、実践も、検証も、協議も、すべて、大切なのは「事実」である。子どもの事実、子どもの学びの事実である。

## 2 とにかくやってみることから

人は、それまで当たり前のようにやってきたことは、簡単には変えられないものである。そのやり方が身体に染みついているからである。そして、そのやり方は、ほとんど習慣のようなものになっていて、よほど意識しない限り、習慣的な所作や言動を改めることは難しい。

しかし、その体に染みついているものを変えよう、変えなければと思うチャンスは必ずある。大切なのは、そのチャンスを逃さないことだ。その一つが、自分が勤務する学校における授業研究である。

私がかかわった学校でのことである。その学校は、私がかかわり始めた年度に「学び合う学び」の授業づくりを開始した。取り組み始めて3年目の秋、公開研究会が開かれ、大勢の参観者に向けて二人の教師の特設授業が行われた。そのうちの一人は50代のベテラン教師だった。研究会が終わり、校長室に引き上げた私の所に、私に会って話をしたいと言ってその教師がやってきた。彼女は、私に向かって、しみじみと語った。「この年齢になって、授業が変わるとは思ってもみませんでした。学び合いと出会ってほんとによかったです」と。

この教師は、この時、自分が勤務する学校の研究によって自分の授業が変わったと語った。ということは、取り組み1年目のときは、長く行ってきた自分の授業への疑問がほとんどなくそれを変えるなど思いも及ばないことだったのかもしれない。しかし、その年度から2年目にかけて、自分よりず

っと若い教師の授業に変化が生まれた。そのとき、その教師は、徹底して学びというものを子どもの側から考えたのかもしれない。そうしたところ、子どもにとっての学びが見えてきたのだろう。それはその教師にとって衝撃的なことだったと思われる。それ以降、授業を変えたいと思うようになった、そういうことだったのだろう。

彼女は、わざわざそれを私に話すために校長室に来てくれたのだ。うれしかった。彼女は、学校の授業研究によって、自分を変えるチャンスをつかんだのだ。

ただ、だれもが学校の授業研究を自らの授業を変える機会とできるわけではない。そうできるかどうかは本人次第である。また、本人の気持ちに影響を及ぼす周りの状況次第でもある。

前掲のベテラン教師の場合、彼女の気持ちに影響を与えたものはいくつもあったと思われる。ただ、私は、「学び合う学び」に出会ったことと、若い教師がいち早くそれを実現したことが大きな要因だったと思っている。たぶん、どちらも、その教師にとってはショッキングなことだったと思われる。そして、自分の教師生活も残り何年かと思ったとき、彼女の中に「やらねばならない」という強い思いが生まれたにちがいない。

そのように考えると、教師が自分の授業を変えなければと思うときには、何らかのショックというか驚きというか、そういうことが起こっているように思う。そして、同じようにその方向で取り組む他者とのかかわり、つながりが直接的な契機になっているとも思う。後は、そうしたショック・驚きと他者とのかかわり・つながりを自分の気持ちとどうつなげ、自らの意思をどう動かすかだが、それは本人次第ということになるのだろう。

そうなるかどうかには個人差があるのは当然だけれど、学校づくりとして授業研究を行う学校において、同僚とともに「学び合う学び」に取り組むということは、一人ひとりの教師が自分の授業を深めたり変化させたりする大きなチャンスになるということは確かだ。大切なのは、とにかくやってみることである。はじめからうまくいくわけではないのだと思い、どこからでも取り掛かることである。そして、やってみたことを丁寧に戻り、次につなげていくことである。その際、同僚から学ぶことも忘れないことである。その小さな積み重ねがよりよい結果につながっていく。学校で取り組む機会をチャンスとして生かせるかどうかは、やはり自分次第だけれど、その自分に影響を与えてくれる同僚性があるかどうかが決定的に大切なのだ。

### 3 校長のリーダーシップ

学校づくりとしての授業研究が実のあるものになるかどうかでもう一つ重要なものがある。それは、校長のリーダーシップである。

授業をするのは教員であり、校長が行うわけではない。しかし、教師たちの授業づくりを方向づけ、その学校の教育の方向づけを行うため、もっとも心を砕かなければいけないのは校長である。授業をしていない校長が、その学校の授業づくりのカギを握っていると言ってもよい。

外部協力者として学校訪問をするようになってから15年間に、かなりの人数の校長に出会ってきた。思い返せば、次々といろいろな校長の顔が浮かぶ。そうして思うのは、それぞれの校長にそれぞれの色があったということである。

そのなかで、「学び合う学び」としての授業づくりが学校全体に浸透し、学ぶ子どもの表情や動きにはっきりとわかるほどの美しさが表れ、教師たちが生き生きしてきたと感じた学校の校長のことが、圧倒的な印象深さをもって思い出される。

思い出してみてもわかるのは、それらの校長のありようは一様ではないということである。もちろん、若い頃から熱心に授業づくりをしてこられて校長になった人は、その経験に基づいて教師たちの授業づくりをリードし支えておられた。授業の事実が見える、子どもの事実がわかるということは、授業づくりの核になることだから、それに長けている校長がよりよい授業研究を築いていかれるのは当然と言えば当然のことである。

しかし、その一方、「本当のことを言えば授業の事実が見えないのです。学び合いのこともあまりわかっていません。だから、私も教員たちと一緒に勉強ですね」と言っておられたのに、その学校の雰囲気が一気によくなって、またたく間に学校全体の取り組みが活性化したということがある。私は、そうなるにはそうなるだけのわけがあったと思う。まずは、リーダーシップの取り方が強く引っ張るというものではなく、教師たちとともに歩むというものだったということである。教師たちにとって、ともに汗をかいてくれる校長、共感的に受け止めてくれる校長は信頼できる校長なのである。その校長が「学び合う学びは絶対によい。遅まきながらそれがわかった」と研究会の挨拶で述べたのだから、その校長の思いが教師たちの胸に染み入っていかないわけがない。教師たちとともに、教師たちの営みから学び、子どもの変容を心から喜ぶ、そういう校長だから教師たちは安心して取り組めるのだ。

さらに言えることは、「学び合う学び」としての学校が充実している学校の校長には、タイプのちがいがあれ共通点があるということである。それは、子どもに親しまれているということである。日常的に子どものことに心を砕いているということもあるだろうし、子どもにもよく声をかけたりしておられるのだろう。そして、こんなにも子どもが校長に会うことを喜んでいるということは、子どもが校長に会う機会がかなりあるということになる。つまり、学校の中を結構な頻度で見て回っておられるのだろうし、各教室に入って教師たちの授業を参観したりしておられるにちがいない。もちろん、そのときの校長は、教師たちの授業づくりを支え、子どもの学びを支え、教師たちと一緒に授業を考えようとしておられたのであろう。そういう校長の存在を子どもたちは肌で感じているのだ。授業のありように深い見識があるかどうかも大切だけれど、それ以上に、本気になって子どものこと、教師のこと、授業のことを考えている校長だということが大切なのだろう。

本年度も残すところ実質3か月ほどになった。私のかかわる学校にも、来年3月で定年退職になる校長がおられる。その中に、本年度から訪問した学校の校長がいる。最初に訪問したのは5月だった。その後、8月、10月、11月と計4回訪問した。最後に訪問したとき私は感動した。それは、その月の各学級の授業が5月のときとは格段に違っていたからである。よくぞここまでの状態になったものと思った。そのとき、そうなったのはこの校長の願望の強さなのだとつくづくと思った。

「最後の一年だけでは十分なことはできないかもしれない。でも、だからこそ、できるところまでやりたいのです」。私に訪問の依頼をされたときそうおっしゃった。そこには、なんとしてもこの一年で「学び合いのある学校」にするのだという覚悟のようなものが感じられた。

その校長に代表されるように、本年度も何人かの校長が表舞台から去っていかれる。最後の3年間で大きな改革を成し遂げて退かれる校長もいる。それは見事としか言いようがない。その過程を見てきた私にとってそれは感動的である。そうした校長が、情熱をもって教師たちとともに見事な学校をつくってこられた事実を残しながら、静かに学校を後にされる。

残り3か月、それらの校長の一日一日が豊かな実りあるものになることを祈りたい。そして、それらの学校の取り組みが、教師たちと新しく着任する校長とによって引き継がれ、子どもたちの学びがますます深まっていくよう心から期待したい。